# まえがき

近時、草本類に属する種の中に帰化植物が多く、植生に変化がみられ、また、それらの生態も顕著に変りつつあると言われている。福生市は、武蔵野台地の西南端に位置し、西に傾斜した地形から成り、多摩川を擁している。また奥多摩の玄関口ともいわれ、都市化と基地を抱えていることが、ひとつの特徴である。これらの自然的条件、社会的条件に加え、一般的な時代背景としての生産活動および生活水準の向上に伴い、植生の生育環境に変化が起ってきている。その結果、野生植物の生育条件は年と共に厳しくなってきていることは確かである。

特に草本類は、木本性植物と異なって、一年生や二年生の種が多く、世代交替が短期間に行われる。それだけに、環境条件の変化が、植生の上に敏感に顕在化することになる。市域内の多摩川における河川状態ひとつをとらえても、水量の減少が水の浄化力を低下し、水質の富養化、腐水化に拍車をかけていることは否めない。在来種、既存種が何時の間にか消滅するのは河川植生の特徴で、特に珍しいことではないが、一方では、今まで知らなかった種が繁茂してきて驚かされることがある。

このように、植物種の消長、植生変化の激しい時代にあっては、地域的自然の歴史を後世に伝承する上でも、また、自然環境の複合的変化を知るためにも、自然の生物調査および記録が貴重になってきている。この草本調査は、現時点における植生を調査し、市域内の草本類の種をリストアップし、植物の基礎資料とすることを主眼として行ったものである。従って、草本性植物の生態、分布の調査は今後に託すことにした。

なお、不十分な点は承知の上で、これを機会に過去の若干の資料、観察を参考にして、市域内草本の植生の変遷および緑地の変遷について概括的に紹介することにした。これによって、植物相の変化、植物量の減少の実態について理解が得られ、みどりの保護に関心を寄せる端緒となれば幸いである。

この調査に当って、調査の遂行の便をとられた教育委員会、同事務当局および写真の掲載に御協力をいただいた佐藤文子、佐藤富美の両氏に深く感謝いたします。

植物調査班主任調査員

宮岡　一雄